神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

マーガレットの庭：自然と人間の関係をめぐる詩人の考察

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2008-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉川, 朗子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/547

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「マーガレットの庭—自然と人間の関係をめぐる詩人の考察」[1]

吉　川　朗　子

William Wordsworth の『逍遥』(*The Excursion,* 1814) には二つの対照的なコテージガーデンが描かれている。ひとつは第１巻に登場するマーガレットの庭であり，もうひとつは第６巻で牧師によって語られる，母親を亡くした娘たちの庭である。これらはもともと，それぞれ独立した作品「廃屋」(“The Ruined Cottage”)，「グラスミアの我が家」(*Home at Grasmere*) のために1797年から1800年の間に書かれたものであり，18世紀末のコテージガーデンの有様の一端を伝えるものとして読んでも興味深い。[2] しかし，これらは比較的近い時期に書かれてはいるが，グラスミアへの移住前に書かれた前者と移住後に書かれた後者とでは，庭の描かれ方に大きな変化が見られる。さらに詳しく見るならば，この変化の兆しは「廃屋」の複数回に亘る書き直しの過程のなか，とりわけゴスラー滞在を挟んで作られた二つの稿本Ｂと

1　本稿は，第138回関西コールリッジ研究会例会（2008年６月28日，於同志社女子大学栄光館）における研究発表原稿に加筆修正を施したものである。

2　これらのコテージガーデンが描かれた時期は，ピクチャレスクブーム，また貧困層の暮らしを改善しようという社会改革運動の高まりのなかで，コテージ，コテージガーデンというものに人々の注目が集まり始めた時期であった（Hunt 71-83)。前者が注目した審美的なコテージガーデンと，後者が目指した生活の糧を得るための実用の庭とが合わさった，新しいタイプのコテージガーデンが出てくるのが世紀の変わり目の頃であり，グラスミアにワーズワスが作ったダブ・コテージの庭はその初期の例と言える（Scott-James 46-47; *The Discovery of the Lake District* 81)。「廃屋」におけるマーガレットとロバートの庭は，cottager と呼ばれる階級—labourer とは違って自活する力があった小農民・職人など，多少の美的センスを発揮する余裕を持ち合わせた階級（Scott-James 9-10）—の作った庭と考えられる。これは基本的にはキッチンガーデン（実用の庭）であるが，ここにはマーガレットの美的センスが生かされている。しかしこの時代，天候不順による凶作と戦争の影響で，こうした階級がどんどん落ちぶれていった。彼らもまたそうした時代の影響を受けたと言える。

Dとの間に見られることが分かる。本稿では，「廃屋」の稿本BとDにおける庭の描かれ方の違いを検討することで，自然と人間の関係についてのワーズワスの考え方の変化を考察したい。

「廃屋」における自然の描かれ方については，新歴史主義批評と環境批評とで全く相反する読みが提示されてきた[3]。このことは，この作品において，自然と人間精神との関係をめぐる詩人の見方というものが極めて曖昧であることを示唆しているだろう。本稿もこれらの先行批評の読みを踏まえてはいるが，ここではその曖昧さを，ワーズワス自身の自然観の変化として捉えたい。「庭」という自然の営みと人為との境界である場所において展開される両者との関係を，ワーズワスがどう捉えようとしているのか，その捉え方はどう変化していくのかを辿ってみたい。ワーズワスの自然観は，彼が湖水地方のグラスミアへ移って実際に庭作りを始めることで大きく変化する。その前段階の作品の二つの稿本を比較することでこの変化の兆しを見出すことが，本稿の目的である。

「廃屋」は1797年春ワーズワスがドーセット州レイスダウンに滞在していたときに，マーガレットとロバートの悲劇の物語として書き始められるが，その後，物語を語る行商人(Pedlar）の精神史が加わったり，また省かれたり，など何度も修正が施され，最終的には1814年に出版された『逍遥』第１巻に組み込まれる。今回検討したいのは，オルフォックスデン滞在中の1798年初めごろに一応の完成を見せた稿本Bと，ゴスラー滞在を経て，1799年中頃に書かれた稿本D[4]の二つである。これら二つの稿本の一番大きな違いは，稿本Bで加えられた行商人―ワーズワスの分身とも言われる行商人―

3　新歴史主義批評の主なものとしては，Jerome McGann, Raymond Williams などがあり，環境批評の主なものとしては Jonathan Bate, Karl Kroeber, Onno Oerlemans などが挙げられる。

4　稿本Dの書かれた時期については，リード（Mark Reed）は1799年４月末から1800年６月の間（*Chronology, EY,* 326）とし，一方リードに依拠しつつもバトラー（James Butler）は1799年２月から11月の間とする（Butler xi)。ワーズワスは1799年２月にゴスラーを出発しているので，いずれの説を採るにしても，稿本BとDはゴスラー滞在を挟んで書かれたと考えてよいだろう。

の生い立ち，精神史が稿本Ｄでは省かれているという点（これらは再び稿本Ｅで合併される）であるが，本稿では，自然の力と人為の関係について，二つの稿本には微妙に異なる見解が示されているという点に注目したい。

１．稿本Ｂ：人間と無関係に存在する自然

稿本ＢとＤを比較する前に，レイスダウンで書かれた断片的原稿と稿本Ｂの違いをざっと見ておきたい。レイスダウンで書かれた草稿を見ると，家の主がいなくなった後の荒れ果てた庭をいかに描くかということに腐心していた様子が窺われるが，死んだマーガレットの頬を這い回る蛆虫，花の衣服を剥ぎ取られる廃屋，雑草に口を塞がれて半ば窒息させられた井戸，イラクサ，クサリヘビ，クモの巣，月明かりにきらめく割れた窓ガラスなど，ピクチャレスク，ひいてはゴシック趣味が前面に出ている。こうしたピクチャレスク趣味は，ゴシックの度合いは薄まっているものの，サマセット州オルフォックスデンへ移ってから書かれた稿本Ｂにも受け継がれている。

> [...] She is dead,
> The worm is on her cheek, and this poor hut,
> Stripped of its outward garb of household flowers,
> Of rose and jasmine, offers to the wind
> A cold bare wall whose earthy top is tricked
> With weeds and the rank spear-grass. She is dead,
> And nettles rot and adders sun themselves
> Where we have sat together while she nursed
> Her infant at her bosom.　(MS.B, 157-65; MS.D, 103-11)[5]

この部分などは，稿本Ａと同じくピクチャレスクの影響を受けていると見

5　「廃屋」からの引用にはコーネル版を用い，稿本Ｂ，Ｄ両方の行数を記す。最初に記した方が引用元であり，後に記した方が，それと対応するもう一方の版の行数である。

てよいだろう。この他にも，嵐の夜にシェルターを捜し求めるジプシーでさえ見過ごしてしまうほどの荒廃ぶりであるとか，茸や苔が生えたベンチの様子などに，ピクチャレスク趣味を見ることができる（MS. B, 31-38）。（これらは稿本Ｄからは削除されている。）

18世紀後半のピクチャレスクブームにおいては，廃屋の美的効果というものが，風景画や大庭園の中のひとつのアクセントとして称揚された。[6] ワーズワスの描く廃屋も，こうしたピクチャレスク趣味の影響を受けていないとは言い切れない。[7] けれども，オルフォックスデン時代のワーズワスは，「コテージガーデンが散歩の目的だった」というドロシーの日記の記述にも見られるように，[8] しばしばコテージガーデンやジェントリーの庭園を見て回るという散歩を行っており，そのときの観察が刺激を与えたのだろう，オルフォックスデンで書かれた稿本Ｂには，コテージガーデンが少しずつ荒れていく様子が，もっと丁寧に描きこまれることになる。[9] 稿本Ｂを作るワーズワスは，

6　スミス（John Thomas Smith）は『農村風景についての見解』（*Remarks on Rural Scenery*, 1797）への序文で，ゲインズバラ以来コテージというものがピクチャレスク美学のなかで注目されているとしたうえで，小奇麗なコテージよりも，貧困のため荒廃したコテージの方がピクチャレスク効果を発揮するとしている。“the neglected fast-ruinating cottage, [...] the weather-beaten thatch, [...] the fissures & crevices of the inclining wall, [...] the wild unrestrained vine, whose “gadding” branches nearly deprive the chambers of their wonted light, [...] the unrepaired accidents of wind and rain—offer far greater allurements to the painter's eye, than more neat, regular or formal arrangements could possibly have done”（Smith 9）. こうした描写はマーガレットの荒廃したコテージの有様を髣髴とさせる。スミスの基準から言えば，この廃屋もまたピクチャレスク美学に適っていると言えよう。

7　ハント（James Dixon Hunt）は，ワーズワスの「廃屋」は素朴な田舎暮らしが失われたことへの嘆きと同時に，ピクチャレスク美学の文脈で読まれるべきであるとし，さらにはこの詩が「コテージ流行」に寄与しているとする（Hunt 79）。しかし以後本稿で示すように，朽ちていくコテージのピクチャレスク的美しさを伝えることは，この作品の主たる関心事ではないだろう。

8　“Cottage gardens the object of our walk. Went up the smaller Coombe to Woodlands, to the blacksmith's, the baker's, and through the village of Holford”（7 February, 1798）; “We［William, Dorothy, Coleridge］all passed the morning sauntering about the park and gardens”（10 March, 1798）.

9　“Daisies upon the turf; the hazels in blossom; honeysuckles budding. I saw one solitary strawberry flower under a hedge. The furze gay with blossom. The moss rubbed from the pailings by the sheep, that leave locks of wool, and the red marks with which they are spotted, upon the wood”（4 February, 1798）というドロシーの記述は，「廃屋」の荒れ始めたコテージの様子の描写（MS.B, 388-94; D, 330-36）にヒントを与えている。

単に廃屋のピクチャレスク的効果を求めるのでなく，庭と建物とが荒れていく過程に注目するのである。

この物語の悲劇は，二年間続いた凶作と，長引く戦争，そして夫ロバートの病気という相次ぐ不幸がきっかけとなっているが，マーガレットにとって一番の不幸は，夫が自分に相談もせず，金貨と引き換えに入隊してしまい，音信不通になってしまったことと言えるだろう。夫の突然の失踪に打撃を受けたマーガレットは，初めのうち庭仕事に励むことでその悲しみを紛らそうとする。けれども庭仕事は彼女を救ってくれない。それどころか，長引く悲しみは，彼女から庭仕事をする力を徐々に奪っていく。

最初の変化は庭に現れる。コテージガーデンの一番の特徴は，家の壁，戸口の周りを美しく飾る，ジャスミン，ツルバラ，クレマチス，フジ，スイカズラなどのつる植物であろう。その一番の見せ場に，行商人は小さな，しかし確実な変化を認める。

> Her cottage in its outward look appeared
> As chearful as before; in any shew
> Of neatness little changed, but that I thought
> The honeysuckle crowded round the door
> And from the wall hung down in heavier tufts,
> And knots of worthless stone-crop started out
> Along the window's edge and grew like weeds
> Against the lower panes.　　(MS.B, 363-70; MS.D, 305-12)

家は一見前と変わらぬこぎれいさを保っているが，家の壁に這わせたスイカズラが重たげな房を垂れ，戸口の周りに押し寄せてきている，とある。これは，庭仕事をしたことのある者，庭をよく観察している者でなければ，気づかない点かもしれない。庭作りにおいて大切な作業のひとつに，刈り込みがある。庭作りは常に，自然の繁茂する力と，それを制御して秩序ある美しさを保とうとする人為の戦いと言える。毎日のように気を配り，伸びてきた枝

は大胆に刈り込んでいかないと，手に負えないことになる。ここではその作業がおろそかにされている。特に，家の顔とも言える戸口を飾る花の手入れができていないというのは，勤勉に庭仕事や家事をこなしてきたマーガレットらしからぬことと言えるだろう。さらにふと見れば，ひょろりと伸びた万年草が窓の高さまで伸び始めている。

家のすぐそばでさえ手入れされていないわけであるから，裏庭の有様は容易に想像がつく。裏手に回り，キッチンガーデンをのぞくと，更なる変化が行商人を待ち受けている。

> The unprofitable bindweed spread his bells
> From side to side, and with unwieldly wreaths
> Had dragged the rose from its sustaining wall
> And bowed it down to earth; the border tufts—
> Daisy, and thrift, and lowly chamomile,
> And thyme—had straggled out into the paths
> Which they were used to deck.
> (MS.B, 372-78; MS.D, 314-20)

これを読むと，それまでマーガレットがどんなふうに庭の手入れをしていたかが窺われる。バラを南向きの塀に這わせる形で育てる方法も，庭を通る小道を縁取るように草花を植える縁取り花壇（herbaceous border）も，コテージガーデンでよく用いられる手法である。そしてこの庭は，美的効果を考えて作られているのみならず，日々の暮らしに役立つようにも作られている。タイムやカモミールなどのハーブ類は，薬や香料，虫除け，防腐剤などとして用いるためのものだろうし，後に黒い土の話が出てきているように，庭には野菜も植えられていたと考えられる。りんごなどの果樹も植えられている。用と美の両方を兼ね備えた当時のコテージガーデンの様子がよく分かる。

けれども今では，役立たずのヒルガオの蔓がバラを壁から引きずりおろし，縁取り花壇に咲いていた花やハーブ類は，装飾という役目を投げ出し，勝手

に伸びようともがき出ている。ここでは植物が擬人化され，意思(悪意とすら感じられる)を持った存在として登場する。“dragged”“bowed it down to earth”“straggled out”といった暴力的な表現は，庭というのが人為と自然の力の拮抗の場であること，人為が自然の力をほんの一時制御しているだけの場所であるということを示唆している。ここに描かれているのは，庭の荒廃というよりも，人為によって抑えられていた自然が再び力を盛り返し，庭の秩序だった美しさを凌駕していく有様であるとさえ言えるだろう。こうした庭の様子を，行商人は「非常にわびしく見えた（seemed very desolate)」と評しているが，他方「美しい（fair)」とも言っている（MS.B, 386; MS.D, 328)。彼がこの庭を「わびしい」と感じるのは，その昔の姿を知っているから，また庭の持ち主であるマーガレットに訪れた不幸を知っているからだろう。何も知らない人にとっては，自然の豊かに繁茂する生命力が感じられる庭は，それなりに美しいものと見えたであろう。

けれども，それから半年後，早春にマーガレットを再び訪れた行商人の目の前には，もはや美しいとは言いがたい荒廃した庭が広がっていた。

[...] Once again
I turned towards the garden gate and saw
More plainly still that poverty and grief
Were now come nearer to her: all was hard,
With weeds defaced and knots of withered grass;
No ridges there appeared of clear black mould,
No winter greenness; of her herbs and flowers
It seemed the better part were gnawed away
Or trampled on the earth; a chain of straw
Which had been twisted round the tender stem
Of a young apple-tree lay at its root;
The bark was nibbled round by truant sheep.
(MS.B, 450-61; MS.D, 411-22)

ここからは，この庭がキッチンガーデンでもあったことが分かる。かつてはきちんと耕され，土作りもされ，畝も作られていたこと，りんごの若木には，その弱い幹を守るための藁が巻きつけられていたこと，冬であってもハーブ類が青々と茂り，おそらく香料や薬，防腐剤などとして様々な場面で生活の役に立っていたことが分かる。庭は，美を失っただけでなく，有用性も失ってしまっている。

けれども，これも自然界における適者生存のルールが働いた結果に過ぎない。野菜のかわりに雑草が繁茂しているし，キッチンガーデンで育ったものは，人間の口に入る代わりに，庭に勝手に入ってくる動物の口に入っている。冬であれば植物が枯れるのは自然の習いであろう。冬の荒廃をできるだけ抑えるべく努力してきた庭師の手入れがなくなれば，庭は周囲の自然と同じく，冬の荒廃を耐えねばならない。そして夏になれば，ちょうどこの詩の語りの現在のように，植物は再び繁茂し始める。

[...] It was a plot
Of garden-ground, now wild, its matted weeds
Marked with the steps of those whom as they pass['d],
The gooseberry trees that shot in long [lank slips],
Or currants shewing on a leafless stem
Their scanty strings, had tempted to o'erleap
The broken wall. Within that cheerless spot,
Where two tall hedgerows of thick willow boughs
Joined in a damp cold nook, I found a well
Half choaked [with willow flowers and weeds.]
(MS.B, 116-25; MS.D, 54-63)[10]

ここでもワーズワスは，今まで人の手に抑えられていた植物たちが好き勝手に伸びている，という書き方をしている。長い枝を勢いよく伸ばすスグリ，

10 MS.B における空白部分には MS.D における語句を補ってある。

塀を越えようともくろむフサスグリ，井戸を覆い尽くし窒息させようとするヤナギラン，勝手に入り込む動物たちなど，ここに描かれているのは，自由意思をもった旺盛な生命力である。

無論先ほど見たように，土が固くなるとか，黒土の畝もない，冬の緑もない，ハーブは虫にやられたり枯れたりし，木の皮は羊に食いちぎられている，りんごの木も枯れてしまった，などマーガレットの衰弱していく様子を反映するかのような庭の様子も描かれているが（MS.B, 450-60; MS.D, 411-22），大方においては，マーガレットが衰弱し，家が崩れ落ちていくことに反比例するかのように，いわゆる雑草たちが繁茂し，野生の動物たちがその生命力を見せていく。庭を作ることが自然を手なずけていくことであるならば，庭の荒廃とは，裏を返せば，この人間による矯正からの解放，庭の解体・再野生化であると言うことができるだろう。詩人の目は，自然へ帰る直前の庭を捉えている。「耕作と解体との境界を越える瞬間（the liminal moment between cultivation and decomposition）」（Crowford 233）を捉えるのだ。

コテージガーデンにとって，家と庭は切っても切り離せない関係にある。庭は家の拡張であろうとし，あるいは庭と家は限りなく境界線をぼやけさせ，互いに融和することを目指す。そのことは，家の壁，戸口に絡みつくツル植物のイメージに端的に現れているだろう。コテージガーデンにおいては，コテージもまた植物のひとつであるように見える。あるいはコテージが植物を宿すひとつのフラワーポットのようになっている。したがって，手入れされなくなった庭で勢いを増し，庭の秩序を破壊した野性の力は，最終的には家にも襲い掛かってこれを打ち崩していくことになる。

［...］Meanwhile her poor hut
Sunk to decay, for he was gone whose hand,
At the first nippings of October frost,
Closed up each chink and with fresh bands of straw
Checquered the green-grown thatch.

(MS.B, 512-16; MS.D, 476-80)

庭と同じく家もまた，手入れが為されなくなれば，自然の猛威に対抗する人為がなくなれば，あっさりとその力に屈していくことになる。自然対人間の戦いにおいて，後者が敵前逃亡したため，前者はあっさりと勝利を収めるのだ。

このように，稿本Bにおける荒れ果てた庭の描写には，庭の変化を，衰えというより，自然状態へ戻っていく過程として描く視点が見られる。コテージとその庭は，一見マーガレットの不幸，悲しみに呼応するかのように荒れていくが，それはいわゆる心象風景とは異なる。現実に手入れがなされないために，人為の力が弱まったために，再野生化が進むのである。それは自然の理法に従った穏やかで静かな光景であって，絶望やわびしさ，悲劇を語るものではないとも言える。

他方稿本Dでは，変わり果てた庭の様子を自然の流れとして理解しつつも，その自然の忘却の流れに抗いたいという人間の思いを認める姿勢が感じられるようになる。自然と人為の関係に対する見方に微妙な変化が現れる。その点を検討してみたい。

2．稿本D：人間に共感する自然

夫の失踪から5年の歳月が過ぎ，すっかり野生の自然に凌駕され，ほとんど崩れかけた人為の砦で，マーガレットは最後の住人として死んでいく。

[...] Yet still
She loved this wretched spot, nor would for worlds
Have parted hence; and still that length of road
And this rude bench one torturing hope endeared,
Fast rooted at her heart, and here, my friend,
In sickness she remained, and here she died,
Last human tenant of these ruined walls.
(MS.B, 522-28 the end; MS.D, 486-92)

稿本Ｂはここで終わっている。マーガレットはこの場所を愛したが，愛に伴う義務を果たすことができなかった。従って，この場所に執着し留まったけれども，自然との闘いに敗れ，家とともに朽ちてくしかない。ある意味ではずいぶんと突き放した終わり方である。それに対し稿本Ｄには，廃屋の由来の物語を聞いた後での語り手の感慨と，そんな語り手を見た行商人のコメントが付加されている。

> [I] traced with milder interest
> That secret spirit of humanity
> Which, 'mid the calm oblivious tendencies
> Of nature, 'mid her plants, her weeds, and flowers,
> And silent overgrowings, still survived. (MS.D, 502-06)[11]

「自然の忘れっぽい性質（oblivious tendencies of nature）」という表現には，自然界は常に変化している（無常である）ので，そこにかつてあった人間の営みの証もやがて跡形もなく消えてしまう，という認識が示されているだろう。けれども，そうした無常の自然界にあっても，人間の営みの跡―マーガレットの悲しみの痕跡（“secret spirit of humanity”）がまだほのかに残っていると語り手は感じる。マーガレットが夫の帰りを待ちわびながら悲しみに耐えながら育てた庭は，今ではすっかり荒れ果ててしまっているけれども，ここにはまだ彼女の思いが残っていると語り手は感じるのだ。ここには，自然の無常を理解しつつも，それに抵抗し，すっかり野生化した植物の繁茂の中にかつての人間の営みを認めたいという願いが感じられる。それに対し，行商人は次のようにコメントする。

11　実はこの部分に発展する詩行は，すでに稿本Ｂを含むノートブックに補遺として現れている。稿本Ｂには528行目の後に“The End”と記されているが，その後十数ページに亘り，断片的な詩行が書き留められている。それは主に１）マーガレットの苦しみに対する行商人の反応（MS.D, 362-75に対応）と，２）行商人の精神的成長の物語に関わる部分（“The Pedlar”，さらには *The Excursion,* Bk.4, 958-68, 1207-75に組み込まれる部分），３）和解的な結末（そのうち約三割が MS.D.493-538に対応）とに分類できる。稿本Ｂを書き終えた段階では，これらの断片的詩行をどういう形で作品に取り込むか，あるいは別の作品を作り上げるべきかを十分吟味できていなかったと考えられる。

"My Friend, enough to sorrow have you given,
The purposes of wisdom ask no more;
Be wise and chearful, and no longer read
The forms of things with an unworthy eye.
She sleeps in the calm earth, and peace is here.
I well remember that those very plumes,
Those weeds, and high spear-grass on that wall,
By mist and silent rain-drops silver'd o'er,
As once I passed did to my heart convey
So still an image of tranquillity,
So calm and still, and looked so beautiful
Amid the uneasy thoughts which filled my mind,
That what we feel of sorrow and despair
From ruin and from change, and all the grief
The passing shews of being leave behind,
Appeared an idle dream that could not live
Where meditation was. I turned away
And walked along my road in happiness." (MS.D, 508-25)

聞き手である詩人が草ぼうぼうの庭に人為の跡を見るのに対し，行商人はその植物の繁茂を美しく穏やかなものと受け止め，そこから悲しみ，絶望などを感じ取って嘆くのは虚しいことだと諭している。崩れたコテージ，荒れた庭というのは，人間的視点から見れば悲しみを引き起こすものだが，自然の視点から見ればそれは一つの変化に過ぎない。人間の営みも，大きな自然の流れの中に組み込まれていると見れば，悲しむべきことは何もないと言うのだろう。稿本Ｄの結びには，この二つの視点が提示されているのである。[12]

12　オーリマンズ (Onno Oerlemans) は，行商人，ひいてはワーズワスが，自然界に人間の営みの跡を辿ろうとする語り手の試みを無益なことと嗜め，自然の他者性，人間との非同一性というものを教えようとしていることを強調する。"The peace the Pedlar preaches ends the desire to overcome death by finding traces of human being in materiality; and the awareness comes from a meditation that must find the immediate perception of things sufficient" (Oerlemans 63). けれども，むしろこの二つの考え方が並置されているところが，稿本Dの特徴と言えるのではないだろうか。

注意して読めば，こうした二つの態度は稿本Ｄの他の部分にも見受けられる。詩の冒頭近くで，廃屋の前のベンチに腰かけていた行商人は，詩人がやってきたのを見て，ひまわりの咲く崩れた壁の方へ案内するが，そこにはすっかり荒れ果てた庭があった。その庭を見ながら行商人は，

[...] we die, my Friend,
Nor we alone, but that which each man loved
And prized in his peculiar nook of earth
Dies with him or is changed, and very soon
Even of the good is no memorial left.
(MS.D, 68-72; MS.B, 130-34)

と言う。どんなよい人間であっても，その人物が生きた証というのはやがて跡形もなく消えてしまうと言っている。ここには，先ほどと同じく「自然界の無常 (oblivious tendencies of nature)」という考え方が示されている。これは稿本Ｂに支配的であった考え方であるが，稿本Ｄではこの一節に続けて，これと矛盾したような考えが披露される。（この部分は稿本Ｂには採用されていない。）

The Poets in their elegies and songs
Lamenting the departed call the groves,
They call upon the hills and streams to mourn,
And senseless rocks, nor idly; for they speak
In these their invocations with a voice
Obedient to the strong creative power
Of human passion. Sympathies there are
More tranquil, yet perhaps of kindred birth,
That steal upon the meditative mind
And grow with thought. (MS.D, 73-82)

自然界の事物に対し，愛する人の死を悼んで嘆くようにと呼びかける態度は，自然界の無常／無情を悟る行商人にとっては，浅はかなものに映るものと思われるが，彼はこうした詩人たちの思いを「虚しくはない(nor idly)」と言う。そしてさらに，自然界の事物には人間の思いに寄り添う思いやりの情があるとするのである。こうした考え方は，マーガレットの思いを無視するかのように暴力的に繁茂し，彼女の生きた証である庭を凌駕していく自然界の旺盛な生命力の描写とは相容れないように見える。さらに彼は，「向こうの泉のそばに立ち，その水を眺めていると，水と自分とが同じひとつの悲しみを共有するように思えてくる (Beside yon spring I stood / And eyed its waters till we seemed to feel / One sadness, they and I)」(MS.D, 82-84) と告白している。人間の心と自然の事物の共感という考え方は，稿本Ｂにもその片鱗が窺えるが，そこでは，“The waters of that spring, if they could feel / Might mourn” (MS.B, 135-36, emphasis added) と仮定法を用いて控えめに表現されているだけだった。

たしかに稿本Ｄにおいても，自然に対するそうしたセンチメンタルな見方を愚かであると自戒する向きはある。たとえば稿本Ｂに見られる次のような箇所を稿本Ｄはそのまま受け継いでいる。

At this still season of repose and peace,
This hour when all things which are not at rest
Are chearful, while this multitude of flies
Fills all the air with happy melody,
Why should a tear be in an old man's eye?
Why should we thus with an untoward mind
And in weakness of humanity
From natural wisdom turn our hearts away,
To natural comfort shut our eyes and ears,
And feeding on disquiet thus disturb
The calm of Nature with our restless thoughts?

(MS.D, 188-98; MS.B, 246-56)

ここには，穏やかで美しく平和に満ちた自然に対し耳目や心を閉ざし，人間の不安や悲しみで自然をかき乱すのは愚かなことである，という考えが示されている。人間の悲しみを自然の事物に押し付けるべきではないという自戒と言ってもいいだろう。稿本Dに新たに付け加えられた次のような言葉も，植物が繁茂する庭を見て悲しいと感じる自分を愚かであるとする認識が示されている。

—You will forgive me, Sir,
But often on this cottage do I muse
As on a picture, till my wiser mind
Sinks, yielding to the foolishness of grief.　(MS.D, 116-19)

けれども，この部分に見られる行商人の態度は非常にアンビバレントである。自然の道理も分からず徒に悲嘆に暮れることを，思慮分別を欠いた愚かな行為としつつも，それを如何ともしがたいと感じているもう一人の自分を，行商人は自覚している。マーガレットの善良さを深く感じていて，彼女の悲しみに深く同情していた行商人は，この荒れた庭を見ると，愚かであることは分かっていても，深い悲しみに沈まないではいられないのだ。[13]

このように，稿本Dには自然の営みに対する二つの見方が混在している。自然の営みは人間の営みとは関係なく存在しており，人間の生きた証など，自然の忘却の彼方にあっさり消え去るのだという認識と，自然の営みにかき消されていく人間の営みに思いを傾けずにいられない性分とが混在している。自然と人間が共感しあうという考えは，愚かだとはされつつも，否定されてはいない。

13　そうした告白は，詩の後半部でも付け加えられている（MS.D, 362-69)。とくに“so deeply do I feel / her goodness, that not seldom in my walks / A momentary trance comes over me”(MS.D, 367-69).

以上，自然の営みと人間の営みとがせめぎあう場である庭を舞台として，すべては自然の繁茂する力によって，忘却の彼方へ沈んでいくという考えが前面に出された稿本Ｂと，そうした考え方を認めつつも，それに抗いたいとする人間の願いをも示した稿本Ｄとの違いを見てきた。では，こうした自然観の違いはいかにして生まれてきたのだろうか。

３．ゴスラー詩群—死・自然・人情

この二つの稿本執筆の間にある大きな出来事といえば，ゴスラー滞在が挙げられる。ドイツ語習得のためにコウルリッジと共に向かったドイツ北部，中世の町並みが残るゴスラーでは，ワーズワスは周囲のドイツ人となじめず，厳しい寒さのためにほとんど家の中に閉じこもって，妹ドロシーと二人，孤独なときを過ごす。この孤独はしかし，想像力の開花という成果をもたらし，『序曲』（*The Prelude*）の第一巻となる部分や『抒情歌謡集』（*Lyrical Ballads*）第二版第二部に収められることになる作品など，多くの傑作が書かれることになる。

この時期に執筆された作品の特徴のひとつに，死と孤独の影が色濃く出ているということが挙げられる（ルーシー詩篇，マシュー詩篇など）。オーレマンズは『ロマン主義と自然の物質性』（*Romanticism and the Materiality of Nature*）の中で，「まどろみが我が魂を封じたので」（“A Slumber did my Spirit Seal”）などのエレジーは，ワーズワスに死の物質性・他者性を見つめさせ，人間の精神の外側に厳然たる実体を持って存在する物質世界と向き合わせた，とする。そしてこれを，「廃屋」に見られる，死を物質的に扱う態度や，自然界を人間の営みと無関係に存在する他者として眺める見方と共通する自然観・死生観と位置づける。[14]

14 “I examine those moments in his poetry that reflect his ability to confront the materiality of nature [...] These moments are frequently elegiac, in which the poet sees in meditating on death the overwhelming presence of the physical” (Oerlemans 24); “Elegiac moments in Wordsworth’s poetry frequently involve direct confrontations with matter, forming a sub-corpus of unblinkered investigations of the spiritlessness of the ↗

「まどろみが我が魂を封じたので」などは確かに，死の物質性を衝撃的なまでに意識させる作品と言えるだろう。「人は死ぬと物質として自然界の一部になり，生きている人間に対しては完全に無関心・無関係に存在する他者となる」ということを告げている作品だと読むことができる。けれども他方では，「愛しい人は死んでも自然の一部として生き続ける」と思いたい，人間の愚かだけれど切実な願いを表すものとも読めるだろう。死の物質性，自然界の他者性を認めつつも，それに抗いたい人間の思いを認める，稿本Dのアンビバレンスとも通じるのではないだろうか。

ここで，ゴスラーで書かれた作品の中で見過ごされがちな小品，「墓堀へ」(“To a Sexton”) を見ておきたい。Sexton というのは教会堂の用務を勤める寺男のことで，鐘を鳴らしたり墓を掘ったりする仕事を担っているが，この詩で彼は古い墓を掘り返し，遺骨をまとめて納骨堂に納めようとしている。人間は死んだら骨という物質に成り果てる。骨には感情などないわけで，だんだん込み合ってくる教会墓地を整理して新たな死者を迎え入れるために，墓守である彼は古い墓を掘り起こし，一箇所に集めようとする。こうした寺男に対し，語り手は，頼むからそんな非道なことはしないでくれと懇願し，生きていたときに近くにいた者たちは，死んでも近くにいられるようにしてあげてほしいと頼む。そして自分が死んだときには，たとえそれが長い時が経った後であっても，愛する妻のそばに埋めてほしいと頼む。愛する人とひとつの墓に収まり，死んだ後もずっと一緒にいたいという願いは，ある意味で愚かな，あるいは虚しい願いであろう。たとえこの語り手の願いを聞き入れて，寺男が一時墓地を整理する作業を中断したとしても，何十年後かには確実に掘り返され，どれが誰の骨だか分からなくなってしまう。あるいはそこにかつて誰かが埋葬されていたことなど忘れ去られ，新たな墓が作られるかもしれない。墓に刻まれた名前など二百年もたてば磨耗して読めなくなり，

↘ external realm” (39); “Part of the poem [“A Slumber…]’s uncanny dialectic is to connect the profound otherness of the dead girl to that of elemental nature” (43).

もう二百年もすれば墓石自体が壊れてしまうかもしれない。それでも，墓や碑文を記すことで自分が生きた証を遺していきたいと願うのが，人の情というものだろう。先に逝った愛する人の思い出や記念碑を残しておきたいと願うのが，人の情であろう。この詩には，そうした自然な人情が素直に表明されている。「自然の忘却」などという言葉はこの詩には登場しない。

さて，ここで注目したいのは第３連である。

> Look but at the gardener's pride—
> How he glories, when he sees
> Roses, lilies, side by side,
> Violets in families!
> By the heart of Man, his tears,
> By his hopes and by his fears,
> Thou, old Grey-beard! art the warden
> Of a far superior garden.　(17-24)

ここには，教会墓地をすばらしい庭とみなし[15]，墓堀の寺男を土を掘る庭師と等価に見る視点が示されている。庭師と同じく墓守は，すべてを自然の物質性という忘却の渦へ飲み込もうとする力に対して，わずかなひと時であっても，限定されたものであっても，抵抗しようとすべき存在なのだ。

墓地を作ることと庭を作ること，これはともに自然の営みへの，人間の側のささやかながらの抵抗と言える。忘却の彼方へ追いやられることを恐れて，我々人間は墓を建て，墓碑銘を刻む。それがわずかの期間の執行猶予に過ぎないことを知りつつも，そうせずにはいられない[16]。庭もまた，自然の力を人間が制御しようとする営みと言える。その制御の力は限定的なものでしかな

15　Cf. "We are Seven" には a cottage girl が出てくる。彼女は "church-yard cottage" に住むという。つまり教会墓地と同じ敷地に家があり，墓地はいわば彼女の庭—編み物をしたり，遊んだり，時には食事をする場所となっている。そしてあたかも "The garden is green" と言うかのように，"Their graves are green" と描写されている。

16　こうした考え方は，後に "Poems on Naming of Places," *Essays upon Epitaphs* へつながっていくと言えるだろう。

いが，せめて自分の家の周りの小さな囲い地だけでも人間にとって心地よい空間になるよう，自然を制御しようとする。自然の猛威を一時忘れ去り，穏やかで美しい，慰めを与えてくれる「慈悲深い自然」という錯覚を作り出すべく努力する。これが庭師の仕事と言えるだろう[17]。庭師と墓守の仕事はある意味で共通するということを，この小品は示唆している。どちらも，自然の力に抗おうとする人間の願望に奉仕するのである。

ところで，稿本Ｄにおける自然観の両義性を示す例として上に挙げた箇所（MS.D, 508-25, 73-82, 116-19）は，稿本Ｂの記されたノートブックに，断片的な形ではあるが，すでにその原形が記されていた（Butler 195, 199, 275, 277, 279）[18]。従って，稿本Ｂと稿本Ｄにおける自然観の違いは，ゴスラーでの詩作を通して生まれたと言うことはできない。けれども，稿本Ｂを仕上げる際には不要とされて本文内には織り込まれなかったこれらの詩行が，稿本Ｄでは採用されているということ，特に508-25行目については，作品の締めくくりという重要な位置に採用されているという点は，注目してもよいだろう。この結びが採用されたことにより，稿本Ｄにおいては，「自然の忘却の力」というものに対する二つの相反する見方が明確な形で示されることになったのだ。

ゴスラーで書かれた詩群は，たしかに，ワーズワスに死の物質性・他者性を見つめさせ，人間の精神の外側に厳然たる実体を持った物質世界が存在していることを再認識させたかもしれない。けれどもそれと同時に，これらの詩群はまた，自然界に慰めを見出したい，あるいは人間の気持ちに寄り添う自然というものを想定したい，という人間の愚かな願いに対する，詩人の理解をも深めたのではないかと思われる。そうした態度は，「廃屋」稿本Ｄ執筆に当たって，アンビバレントな結びを採用させた態度とも通じるのではな

17　こうした考え方は，のちにワーズワスが友人 Beaumont 卿夫妻のために設計した Winter Garden 構想へつながる。ワーズワスはこの計画で，幻想に過ぎないとしても，冬の寒さや厳しさ，また，老いややがて来る死の影を一時忘れさせてくれる庭を作ろうとする。

18　注11参照のこと。

いだろうか。

それでも「廃屋」においてはまだ，自然の忘却の力の大きさを認め，その力を前にして人間の力を主張することは浅はかなことであるという姿勢を残している。人間と自然の共感という考え方を，信じようとしつつも愚かなことと退けようとしている。それに対し，グラスミアへ移住して実際に庭作りを始めると，ワーズワスの自然観にははっきりとした変化が見え始める。たとえば，マーガレットにとっては慰めにならなかった庭は，兄の不在の淋しさを紛らわそうとする妹ドロシーにとって，そして「グラスミアの我が家」挿入のエピソードでは，母親に死なれた家族にとって，慰めとなる。庭作りは，遺された者たちがその悲しみを乗り越えるための手段となる。また「廃屋」においては人為と自然の力とのせめぎあいの場であった庭は，グラスミアでは自然の力と人間の想像力との協力・共存の場となっていく。稿本Dで示された，人間の感情に寄り添う自然という考え方が，グラスミアへ来ると前面に押し出されるのだ。この点については，また稿を改めて論じたい。

Selected Bibliography:

Birmingham, Anne. *Landscape and Ideology: The English Rustic Tradition, 1760-1860*. Berkley: Univ. of California Press, 1986.

Crowford, Rachel. *Poetry, Enclosure and the Vernacular Landscape: 1700-1830*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

Hunt, John Dixon. "The Cult of the Cottage." *The Lake District: A sort of national property*. Countryside Commission and Victoria & Albert Museum, 1986, 71-84.

Oerlemans, Onno. *Romanticism and the Materiality of Nature*. Toronto: Univ. of Toronto Press, 2002.

Reed, Mark. *Wordsworth: The Chronology of Early Years: 1770-1799*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1967.

Scott-James, Anne. *The Cottage Garden*. Penguin, 1982.

Smith, John Thomas. *Remarks on Rural Scenery*. London, 1797.

The Discovery of the Lake District. Countryside Commission, Victoria & Albert Museum, 1984.

Wordsworth, William. *The Ruined Cottage and The Pedlar*. Ed. James Butler. Ithaca: Cornell UP, 1979.
Wordsworth, Dorothy. *Journals of Dorothy Wordsworth*. 2 Vols. Ed. Earnest De Selincourt. London: Macmillan, 1952.
石幡直樹他『ロマンティック・エコロジーをめぐって』英宝社 2006年